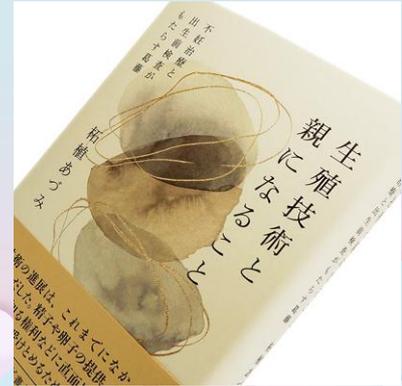


# 「生殖技術と親になること」で伝えようとしたことと 医学ジャーナリズム、 と調査研究

柘植あづみ  
(明治学院大学社会学部)



## 『生殖技術と親になること』で伝えたかったこと

- 子どもが欲しいのになかなかできない。さまざまな苦痛や困難に耐え、体外受精や顕微授精などの生殖技術を長く続けても、子どもができない。
- そんな場合には、他人から提供された精子や卵子を用いて、体外受精をすることが、世界的に増加した。
- その技術を求めて日本から渡航する人が増えていた。いったんコロナ禍で休止したものの、再開。
- 2020年に生殖補助医療法（略称）が制定され、具体的な規制が定まる前に、国内でも実施されている。

## 『生殖技術と親になること』で伝えたかったこと

- 商業化された精子や卵子を提供する精子バンク、卵子バンクでは、提供者の身長、肌や瞳・髪の色などを選べることもある。
- 商業的な精子バンク、卵子バンク海外では、精子や卵子を提供する人に遺伝性の病気がないかを調べる。以前は家族の病歴を確認していたが、現在は一部の病気遺伝子を調べる遺伝子検査が行われる。
- つまり、生まれてくる子の遺伝学的管理が強化されている。

### カナダで出会った女性同性カップル

赤ちゃんが部屋をハイハイしているアパートでインタビュー。精子バンクで提供者を選ぶのはいやだったので、知人から提供してもらった。妊娠時に40歳だったので出生前検査について詳しく知らされた。その女性は心配なので検査を受けたいと思ったが、パートナーの女性は反対した。彼女の兄がダウン症だった。その兄と一緒に育った。その兄を否定したくないと言った。検査をしないで出産。カナダではめずらしいと説明された。

## 『生殖技術と親になること』で伝えたかったこと

- 不妊は、晩婚晩産という社会問題として語られる。
- 女性の妊娠年齢があがると、生まれてくる子の「健康」が不安になり、出生前検査を受ける割合が増えてきた。
- 女性の年齢があがると、体外受精をしても妊娠しづらくなり、妊娠しても流産する割合が上昇するためという理由で、受精卵が発達した胚（=エンブリオ）の遺伝学的検査が臨床研究として大掛かりに実施された。これは結果として胚の選別をすることになる。
- つまり、生まれてくる子の遺伝学的管理が強化されている。

## 『生殖技術と親になること』で伝えたかったこと

- 親になろうとしている人たちの望みは（できるだけ）自分たちの健康な子どもが欲しい。これは、ささやかな願い。

「どうして他人の精子を用いてでも子どもをもとうとするの」という私の疑問→子どもが好きだった、パートナーを父親にしたかったなど。

さらに深く尋ねたところ、..

- オーストラリアで出会った夫婦

夫に不妊原因があるとわかり、妻がとても子どもを欲しがっていることを知っていた夫は離婚しようと提案。妻は「子どもをつくるために結婚したのではなく、あなただから結婚した」と離婚を拒否。夫から提供精子を使おうと提案。悩んだ末にそれで子どももった。インタビューのあとで、妻は自分が孤児院で育ったので、両子どもが何人もいる明るい家族が欲しかった、と話した。

## 『生殖技術と親になること』で伝えたかったこと

- 医療は、健康な子どもが生まれることが、親にとっても子どもにとっても「しあわせ」と考え、技術を発展させる。
- そのための医療技術の発達には、親になろうとしている人に、あるいは医療者にも安心／不安をもたらす、さらに技術の進展に拍車をかける。
- では、健康とは何か、しあわせとは何か。生殖技術が進んだ社会は生きづらくなっていないか、息苦しくなっていないか。医療も社会も、何かを外におしやろうとしていないか。

## 「生殖技術」と医学ジャーナリズム、調査研究

### 医学ジャーナリズム

- 何を伝えるか、伝えたいことを模索しながらも、**読み手、聴き手の反応**を考慮する。
- 知られていなかったこと、常識を越えることを伝え、**感動させられること**を目指す。
- 情報、知識の追加によって社会的課題・問題の指摘やその解決への提言を行う。

### 調査研究

- 最近はその研究がいかに学術に貢献するか、社会に貢献するかを(**即効性**を)問われるようになってきている。(例えば理科系の基礎研究費)
- 知られていなかったこと、常識を越える社会の現象を描き、伝え、**新たな理論**を生成する。
- 情報、知識の追加によって社会的課題・問題の指摘やその解決への提言を行う。

## 研究者として注意していること (たぶん医学ジャーナリズムと共通)

1. 自分自身がつまみバイアス（差別や偏見など）を常に意識できるように鍛える。その方法は、価値観が異なるいろんな人と話す、その主張って「ワガママ」じゃないのと思う声に耳を貸す。めんどくでも会う（電話、メール、オンラインが使いながらも相手が拒絶しなければ会う）。
2. 常識的な結論に逃げない。「それって調査しなくっても、わかることじゃないの」と自分に突っ込みを入れる。
3. 調査先からの批判、文句を恐れぬ。研究倫理は十分に配慮しながらも、書いて嫌われることは覚悟の上。
4. 研究者の方が偉くなっていないかをつねに点検する。
5. 大変だけど楽しむ。

## 医療に関する調査研究と医学ジャーナリズムの より良い関係

互いに、課題・問題に気づく契機とする。どちらが先でもいい。

議論しあう相手になる。結論を急がない研究者と急がなければならぬジャーナリスト。互いの刺激になる。

まだまだあると思うので、これからもよろしくお願いします。